

長編『兼ちやん。』

東京女子高等師範學校教授 岡田美津

(一三三) 夏のゆふべ

田村一家は岩磯にある原田の家へ日曜をかけて遊びに來たのだが、一行が着いて一時間もすると、お天氣がすつかり悪くなつてしまつたので大落膽の態なのだつた。兼ちやんは窓際に立つて霧のかゝつた海を不平顔をして眺めてゐた。大人達は……千代坊はもう寢かされてしまつた……兼公にはてんで面白くもない事柄を話しあつてゐた。

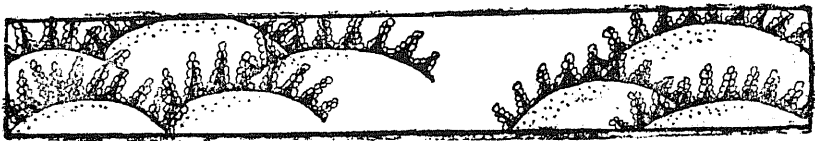
「戸外へいつてもいゝ。」とかれば母親に尋ねた。……母親は編物をしながら原田のお祖母さんと話してゐた。

お芳は窓の方を見て、

「今夜戸外へいつていゝかなんて、お前さくまでもないぢやないか。」

「今、そう降つてゐないもの。」

「これよりひどく降りやうはない。出るとすぐずぶ濡れになつてしまふ、我慢してうちにおいで、明日は晴れるかも知れないから。」



「あたゐ棧橋へいつて汽船の入つてくることが見たいんだよ。」

「ほんとにあいにくだね。でも今夜は戸外へ出られないよ。大きなあの繪本をどうしたの。」

「繪みんな見ちまつた。」

「可哀さうにナ。」とお祖父さんが「家の中にじつとしてゐるんぢや面白くあるまい。吉さん何とか少し遊ばしてやれよ。足の上にも乗らしてやつたら。」

「さ、來い。」と父親は氣輕に引受けて「さ、お父ちゃんの上に乗るな。」

「あ、もう大きくなつてしまつてそんな事ぢや面白くないんだよ。」とお祖母さんは兼ちゃんが喜んで應じさうもないのを見てとつて「ね、そうだね。」

「あゝ。」と兼公がつぶやく。

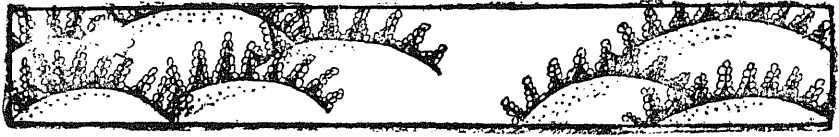
「ぢや ドミノの板で家を建てるのは。」とお祖父さんがきいた。

兼ちゃんは顔を振つた。

「ぢや將棋の駒でお城を作るのは。」

兼ちゃんはまた頭を振つてますく、退屈さうな陰氣な顔をした。

「兼坊の好きな事知つてるぞ。」と父親が横槍を入れた。「いゝ遊びがあるんだつたナ。お父



ちやんが龍になつてテーブルの下の洞窟に隠れて居ると、兼坊が獵にくるんだ。この朝日新聞で槍をこしらへて上げるからお前龍を突き殺すんだせ。いゝか。」

「そいつは豪義だ。」祖父がいふ。

「まあ 大變だらと！」祖母がいふ。

「お父ちやんと坊は龍ごつこで面白からうが。」とお芳はにぎやかに口を出して「お父ちやんのヅボンのはたまらないね、今日はしやれて来たんだから……お前さん少し上へあげてお置きよ……膝のところが擦れないやうに。」

「承知々々。」と返事をして吉藏は新聞を槍の形に巻いてゐた。

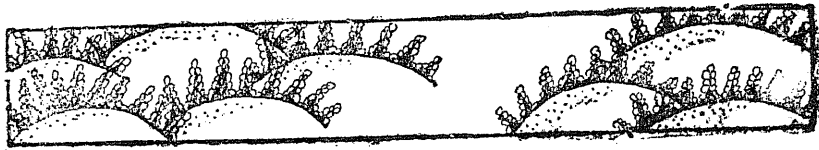
やがて出来上つた槍を子供に渡して、自分はテーブルの下に入り、そこで赤い毛布で頭部を包んでしまつた。

「さ、いゝぞ、兼坊、いつでも来い。」と怒鳴つておいて彼は怖ろし氣な唸り聲を立て始めた。

「これはまあ、たいした遊びだ！」と祖母は面白がつた。

「お前さん、ヅボンを上げたの。」とお芳がきいた。

「龍にそんな事が出来るかい。」と吉藏は答へて、相かはらず咆哮してゐると、兼公は足音



を忍ばせて獲物を狙ひにかゝつた。

「お父ちゃんの眼をつぶすんじゃないよ。」と祖母はすこし心配氣に注意した。

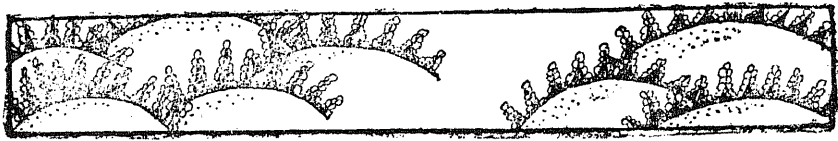
「籠をちよいと突いて洞穴からおびき出してごらん。」と祖父はいつて「お祖父ちゃんも少し身體が利くと龍になつてやるんだがな。」

丁度その時龍が獵人の脚を抓いたので、獵人は耳をつん裂くやうな聲を立て、やみくもに槍で衝いたが、敵を仕止めるまでに行かなかつた。遊びが今佳興に入つて來たのである。「穴から出て來い。おいぼれの龍め、からだの真ん中に孔あけてやるぞ。」と大膽不敵に兼公がわめくと、

「ゴウ！ ガツ！」と龍はテーブルの思はぬ側に現はれる。

この時、室の戸が明いて原田の叔母さんが入つて「どうした騒ぎ、とうした騒ぎ。」と濼い顔をして尋ねた。吉藏は床から起ち上つて、何氣ない風をしようとし、兼公は折角の興を醒まされたので義理一邊の叔母にして窓のところへ退却してしまつた。

原田の叔母さんは、夫の雜貨店がだん／＼繁昌するので、この岩磯に七八の二ヶ月原田老夫婦の住宅から遠くないところに、二間座敷を借りて居るのだつた。この人は偉らがりやの儿帳面やなので、吉藏夫婦とは反りが合はず、ことに兼ちゃんは此人をふかく厭がつ



た。お芳がよく言ふやうに「此人は上品だけど腹立ちッぽい」のだつた。

「私や棧橋へ主人を迎へに行くつもりだつたけれど」と座につきながら彼女は話した。「こんな濡れてしまつたから、一寸こゝへ寄つたのですよ。」

「よくおいでだ。」と原田の老人は親切にそれに應じた。「元吉はどの船で来るのかね。」

「午後七時の汽車で立つのでしてね。それより早くは店を出るわけに行きませんの。」

「商賣がうまく行くのなら元吉だつて愚痴も言ふまい。」と原田の老細君は機嫌よく「元吉はきつとお前さんを尋ねてこゝへ来るだらう。」といつた。

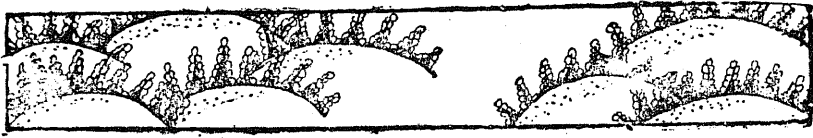
「そうでせうよ。」と答へておいて、それから彼女はお芳の方を向いて……しかし一同にきこえがしに……「黒根の奥様からたつた今御手紙が來ましてね。」

「オヤそうですか。」とお芳は慇懃に答へた。また始まつた、面白くもないこの人のお歴々の知り合ひの話をきかされるのだナと心の中で覺悟をしてゐた。

「黒根！ 變てこな苗字だな！」と老人が言つた。

「古い家柄なんですの。」と彼女はつんとして答へた。

「戦場に馴れきつた古武士が」と吉藏が小聲でくすくす笑ひながら後句をつけると老人は膝を打つて哄笑した。



「黒根の奥さんの手紙では黒根先生はあの土地をお去りになるンですとさ。」彼女はつとほて話した。

「だれを殺したんですエ」と老人が訊いた。吉藏は大笑ひを噛みつぶした。

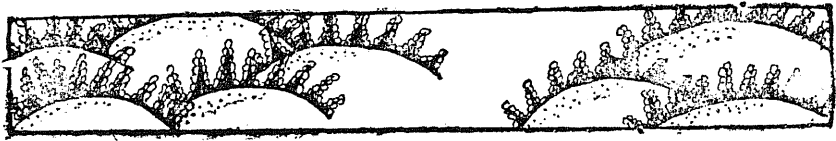
「黙つておいでなさいよ。」と老細君は囁いた。伴の嫁が……いつもよく腹を立つのだが……今夜もまた立腹するかと冷々してゐるのだつた。

「黒根先生はどこだかの市に招聘されなすつたんだ、よいお役だそうですが。これから冬にならうツていふのに、あの奥さんが居らつしやらなくなつてまあどうしませう。」

「その奥さんは炭や蒲團を施こしなさんですか。」と老人は眞面目くさつて問ひかへした。彼女は老人をキツとにらんで、

「私は黒根さんの交際社會での位置の事を申して居るンですの。」と硬くなつて「これから會や集まりにあの方がおいでがなくて、さぞ淋しい事でせうよ。それアお上品で……イゾク的(貴族)と申してもよいンですね。あの方とは私も御親切に願つてゐましてね。よく宴會などの幹事にご一所になると、仕組みがうまいツてみなさんが御賞めになりましたワ。黒根の奥さんはタテアン(立案)がお上手だつてどなたでもそう仰いますよ。」

「ちやその方が居なくなると、お前さんがその代りをしなくつちやならないわけだな。」と



老人は吉藏に眼くばせしながらいつた。

「え、まあ、出来るだけはしますけれど。」とかの女は謙遜した。「あの奥さんは旦那が薬種店を出していらつしやるのを始終嫌がつてネ。」

「なんだッて嫌がるンだ。薬を飲めッていふのがその人の商賣なら、薬を賣つたッて差支ないぢやないか。」と老人はいきまいた。

「上流の方から見ると、相應しく思へないンですの。」

「くだらない！ お前さんの亭主だつて商賣してゐるぢやないか。」

「雜貨商と藥種屋とは大變にちがひます。藥種屋を出してゐる人が國王陛下から爵をいたゞいたなんて例がありませんもの。」

原田の老人は噴笑してしまつた。

「オイ、ちつと氣を付けてくれ。うちの元吉は爵なんか欲しがらぬぢやないから、馬鹿々々しい！……兼坊こゝへおいで、そして話をしてくれ。」と老人は彼女の自慢話の腰を折りたくなつたのだ。

兼公は窓のそこからやつて來て祖父の膝にもたれて

「あたい、暗誦するの、お祖父ちゃん。」



「エ、暗誦する？」と祖父は大悦びで「ちや、お祖父ちやんが先にすこし讀んできかせよう。」といつて眼鏡をかけて、近くの本棚から古び手ずれたお伽話をとり出して、

「どれをよんでやらうな。」

「ソラ箱の中に入れてしまひにガイ……ガイ……骸骨になつてさ、も一人に飛びついた人のあの話。」

「伯父」ツていふ話かい。

「あゝ、あたいたいの話好き。」と兼公はもう身慄るひをして待ちかまへる。

「何ですツて？」とお芳は聲をかけた。「お父さん、あの話はおよしなさい。この前にもこの子は夜うなされたんですよ。」

「骸骨のせいぢやないんだよ、母ちやん。」と兼公は哀願した。「夜の御飯に豆のお汁たべたからだよ。あたいたいの豆のお汁たべると夢みるんだよ。……肝油も」

「今夜、この子はおれと寝るんだ。お父ちやんとなら怖くないだらう。」と吉藏が口を出した。

「あゝ。」

さんざ論じあつた末お芳は不承々に承知をした。そこで老人はその話を讀み出したが





ほんとは兼公は中途のところをちつとも面白いとおもはずたゞ最後の大變事のところだけを待つてゐるのだつた。いよ／＼そこへ話が來て老人が息もせわしく身振り澤山に讀んできかせると、兼公は口を明いて眼を見据え、快味のある恐怖に身體をふるはせるだつた。そしていよ／＼最後の「罪びとの魂は地獄に落ちてしまつた。」との文句がすむと、すぐ兼公は

「も一つ別の、も一つ別のお話をよ。」と叫んだ。

「もうおしまひ。もういけない。」

「よう、も一つよ。あのギザ／＼のナイフで人を刺し通してそして石で打つてそして水中へ入れてそしてめつかつてひどい目に遇つた人のあの話をさ。」

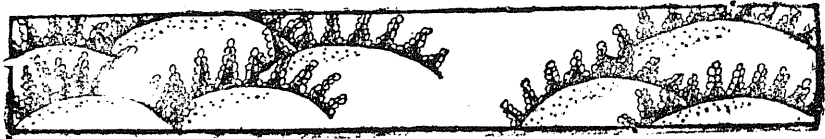
老人はとう／＼説き伏せられて、少し休息してからまた

「ユウジン、アラム」の話を讀んできかせた。それがすむと、こんだは兼坊が何の暗誦をしたらよからうとお祖父さんが言ひ出した。

「ご褒美に一錢上げるよ。」と彼は誘ふた。

「お父ちゃんも一錢上げるよ。」と吉藏からも

「お祖母ちゃんはお菓子をや。」と老細君も、



「あたい 出来ないもの。」と兼ちゃんはいふ。

「お前上手にやるぢやないか。」と父親がいふ。「そら火事の船の少年、母ちゃんに教はつたあれをおし。」

「あれを覚えさせるのは大骨折でしたよ。」とお芳が話した。

「どれ、一つきかせておくれ。」と祖父が頼む。

「あれ、つまらないや。あたい記憶てゐないよ。」と兼公は答へる。

「でもみんなが聞きたがつてもよ。さ、してごらんお前利口だね。」と祖母がいふ。

「お前よく記憶でゐるくせに。そんなにきまりわるがらないでい。」と母親がいふ。

「お祖父ちゃんの財布に五錢玉があるな。」

「お父ちゃんどこにもあるな。」

さすがの兼公もこの賄賂には心が動いたと見え、

「するよ。」とかれは思ひきつて呼ばつた。

誰もく拍手した。たゞ原田の叔母さんだけは「子供の育て方がどうかかうとか」口小言をいつてゐた。そこでお芳も 子供の無いものが、子供の育て方のことなんかいふとか何とか小聲につぶやいた。相手はそれがきこえぬ振りをしてゐた。

「あたい焼死ぬ少年のあれしないよ。」とだしぬけに兼ちやんが言ひ出した。

「ぢや他のおしと祖父がいふと、

「他のなんぞ知らないんだよ。」と母親が言つて「あれを覚えさせるのに半年かゝつたんですもの。」

「他の知つてるよ。金子の初ちやんに習つたの。」と子供が口を出した。

「何ていふ題だい。」

「暗誦してしまふまで教へない。」

「それぢや暗誦してごらん。」

兼ちやんは兩手を後ろにやつて、いくども笑つたり、やり直しをしたりして次の歌を暗誦した。

一、二、三、 あたいの母ちやん 蚤とつた。

その蚤 どうした。炙つて、焼いて、

御かず、にして食べた。

「それツきり。」いつて彼はワハ……と笑ひ出した。

祖父も祖母も父親も笑つた。お芳も原田の細君さへ居なかつたら一所になつて笑つたら

うと思はれた。

原田の細君は不快さうな顔をして兩手を舉げて、「まあ何て下卑でるんだらう。」といった

お芳は口惜しさを飲みこんで、もの靜かに

「失禮ですが、今のおことは、宅の件の事を仰るんですか、件が暗誦した歌の文句のことを仰るんですか。」と尋ねた。

「それア……それア……勿論文句のことですワ。」と細君はあわてゝ答へた。

「それなら構ひませんが。」とお芳はいやに愛想よく「文句の事を仰つたのですネ、へー、フーン。」

原田の細君は何か言はうとした時に折よく、夫の元吉が着いたのでそれなりになつてしまつた。

原田元吉といふ人は、大きな親切さうな男で、來るとすぐ兼公を肩に載せてやつた。兼公はこの叔父さんが好きで、この叔父さんとドロツプの袋とをいつも連想させてゐた。

「兼ちゃん、おとなしくしてゐたかい。」と叔父は早速尋ねた。

「あゝ。」と兼公が返事をするのを叔母はにらみつけてゐた。

「それぢや、」と叔父は彼を下ろして「玄關へいつてな、叔父ちゃんの外套のかくしに何か

入つてあるか見て来てごらん。」と言つた。

喜びの聲をあげて兼公は客間から飛び出して去つた。この子が菓子袋から味を見てゐるとお芳もそこへやつて来た。客間に居る人達には千代坊を一寸見てくると稱して出て来たのである。

「兼坊、あんな文句を言ふンぢやないよ。」

「何を」

「あの歌さ。」

「どうして。」

「母ちやがおよしッていふの。」

「ぢや、止すよ。」と口一ぱい頬張りながら返事をする。

「いゝ子だね。」

「あたゐ原田の叔母ちやんにやりたいものがあるよ。」

「お菓子をかゐ。」と笑ひかける、

「うゝん、鼻を二つばかり打つてやりたいンだ。」